

孔子縞于時藍染

京傳作
政演書

鳳凰時をつくらねば、きぬぐの愁もなく、麒麟人を吠えねば、夜道する邪魔にもならず、鳳も出よ、麟も出よ、麟鳳つけるが武藏坊辨慶さんの力でも、微塵も動ぬ。

君が代の紅粉屋八百屋は、史記にうたはれ、二六は入麴先生の會日ぢやが、拒障があつて、止みましたとは、大通家の天窗にひとしく、聖代の時いたれるかな。

山東京傳述

中人以下不
 可以語上
 と怖るゝに
 ども、かの川柳
 點の句に「禪に
 紐があるのと緊
 まるなり」とは
 宜なるかな。上
 を學ぶ下々まで
 善き風を移し、
 惡しき俗を易へ
 て、芋賣りの孝
 行、大工の忠義
 酒屋の御用も朋
 友の交りを厚く
 し、切見世をそ
 そりて、やい磔
 野郎と、口から
 子の曰はくを讀
 めば、四海皆兄
 弟の如く、専ら
 人にして物貰ひ
 を好む。禮
 「魯の西の狩に
 麟を得たりと



あれば、孔子も淋病は疾まじつたと見え
ます。
「六臣註の文選の拂ひ物がござるがお求めなされぬか。」
左傳に「西戎罪無し、玉を懷あれば此方共の様な幸福な身の上はござるに先生。」
時に先生。逝く物は斯くの如きか、晝夜を舍てずと、
は、物日を切りかけられた客の事かね。
「私共も昔はござる事もござりました。」
不恆は淺草無宿でござる。足下は昨夜、掃き溜の中に
お寝なされた

[illegible]

「はて困つたものだ。鬼王ではないが、四百四病の患ひより、富ほど辛いものはないぞ。」
「これぞ、人、近頃無心の、見掛けで頼む。俺を助けて、何卒此金銭を貰つてくれぬか。」
「論語にも、其老いたるに及んで、戒むる事得るにありと申せば、道に違つた金銭はお安い御用ぢやが受けられませぬ。」

論語集注
そのあつてふ
やうなでい
はさうといふ
うへにありし
りてふみち
うがうとほハ
ふまの
用トヤガ
うけられ
まゝ

子に財を以つて人に分つては
 語を思ひへる
 買ひも女郎に引
 かれて遊ぶと女
 男なりとし
 郎は旅人の各な
 ぞと見ると忽ち
 襟元についてか
 けのめしつ角
 大金をおつつけ
 なたるぬ世の中
 なり。無心の文の
 文句に曰く
 しまたぞやしめ
 したむらせ候
 色々此方事も
 偕々此方事も
 がちと仕合せ
 下されかし
 程も枕中此
 客も枕中此
 の財布に入り縮
 て五十兩入満
 附の下の押附
 けられまふら
 せ候とそれよ
 り段々と都合



染藍時子縞子孔

宜しき事のみ
 にて、節句前
 も呉服屋より
 是非々々百兩
 ばかり請取り
 費ひくれ候様
 に申し、兎角
 押附けたがり
 候ひしまゝ、遣
 手業に受合せ、
 盆前までと申
 せ候ぬし様
 へは此様な事
 は申し上げま
 じと存じかへ
 しとど、ど、
 ぞ、御都合遊ば
 し、御都合遊ば
 十兩ばかりも
 御費ひ下され
 かし、御頼み
 申上げまゐら
 せ候かしこ。
 「こんな謝るこ
 うとはない。何
 は都合がよく」
 ×



築聖時干縞子孔

斯くて世の中の人、正直を専らとすれば、人として懐しむべきは慾の皮なり。その慾も多くは金銀より起る所なれば、金銀ほど穢はしき物はないと、兎角金銀を忌み嫌ひければ、貧乏人ほど尊く、福人ほど卑められ、中にも女郎買ひに身をうちて、多くの金銀を押附けられたる子息の場合は金銭の棄て場に困り、座頭^かにひと金銭をやる。其の證文に曰く。

やり棄て申す金子證文の事



一金拾兩

判也
但し文字小

右の金子や
棄て申所實證

引取の議は來
る何月何日迄

可申候と受取
は毎月金貳兩

取可申候爲
件後日之證文如

月日
うけ人

極め通り受取
の節は申の五

すまいは申の
「さやうなら

立たれます御
兩きつと御用

の地かしの時
取の地かしの

御座ると申す
領座と申す事

受時



若き手合は女郎
 買ひに多ひの
 金銀を背負ひ込
 み親の厄介に
 かけは不孝の
 至りなり。五刑
 の罪不孝より大
 いなるは無し、
 と孝經にもある
 ものをと正し、
 せめては罪を減
 するため、弟に
 家督を譲り、大
 金を背負つて勘
 當をうけ、立退
 かんと願へば、
 親はまた過つて
 改むるに憚る事
 承知なり。
 「何卒御勘當な
 されて下され
 ませ。七生が
 ならずば二升
 五合でもよう
 ござります。」
 「大學にも人の
 父として慈
 言ふを知らぬ
 か。勘當する



事はならぬぞ
 俺が身代は有
 難いことには
 一年に二百や
 三百は手軽く
 喰込む身の上
 がこれしき
 の金銭をおつ
 附けられない
 苦しくないぞ
 楚國には以
 て寶とせず
 唯善以つて寶
 とすと言ふ文
 言を守り、段
 々世の中にて
 金銀を忌み嫌
 ひ、中にも才
 覺なる男、案
 じて曰く。焼
 味喰を焼くと
 金銭が逃げる
 と言へば、さ
 らば焼味喰を
 焼かんと大火鉢



孔明子縞時靈染

日なし借と言ふ者出でき、裏店などの錢を借りて歩き、返す定め時に受取らぬと大屋へ届ける。

「お前は家主様で御座りますか。別の事でも御座りませぬが、お店の孫介殿に三貫文借りうけまして、毎月二七日の日に二百文づつ返す約束でござりまするが、兎角、酢の蒟蒻のと言つて受取りませぬ。よく申し附けて下さりませ。」

「成程、聞届けました。きつ



と申し附けま
せう。然し酢
の蒟蒻のと言
ふ筈でござる。
あの孫介が下
馬へ出る、甘
い物屋でござ
るから。」
「もしえ、大家
さんへ。此裏
の子供衆が何
處のこに打ち
こむものもあ
らうに、私共
の店へ小判を
ぶちこみやし
た。わつちら
がうちぢや
もの思めえだ
からいつそ氣
にかけて居り
ます。どうぞ
お叱りなすつ
て下はりやし
ばかしくしい。」



呉服屋も福神の名を家名^いについは縁起が悪いとて、町の恵比須屋も貧乏神屋と名をかへ、随分地合の悪い代物を、大高賣りにしければ、殊の外流行り、買手山の如く、市をなしけり。

「手拭の高賣り、三十八匁」
 おきやアがれ。
 矢張り無益記^{むえき}の型だと言ひつこなし。作者もそれは承知さ。



「もう五匁高く
賣つて下さい。
この木綿は地
合が良すぎる。」
「ナニサ、六百
目なら随分高
うござります
此やうに見え
ても、とつと
もう二三度お
召しになると
ちきに破れま
す代物ぢやさ
かい、これよ
り高くは上げ
られませぬ。」
「古語にも千金
の裘あつて千
金の布なしと
申します。」
されば堺町の福
山も損山と改名
し、深川の八幡
も富が岡を改め
負が岡と唱へ、
人々遣手と言ふ
名を羨みにける。



染藍時子縞子孔

君子は争ふ所なしと言へば、博奕諸勝負事は決して弄ばねども中に物好きな者は噓事にてめくりを始めても、互ひに勝を人に譲り、禮儀を正しくする故、一番のめくりに烏が鳴き、睡い目をして、面白くも何ともなし。拙者がひよつと八をめくると赤藏が出來ますから、平に八をお踏み



「なされ。」
 「イヤ、それでは貴公様のお爲に悪く、殊に拙者は大引で御座れば踏みますと八が上がつて、この方へ伸藏が出来ます。此儀は御用捨なされ。」
 「イヤサ、それでは拙者の志が無になります。」
 「合つて呉れろ。」
 「御火を入れませう。」



染薫時子縞子孔

中にも別して徳のある人は所々へ施行の蕎麥店を出し、無代にて往き來の人に振舞ふ。或日、折介鉢のものこの蕎麥を三杯喰ひしが、代もやらずに振舞はれるはあまり道に缺けた事と思ひ人の見ぬ間を覗ひ、錢を五十匁膳の上において逃げ出でしが、是を瘡きが見つけ、あとより大勢追かけて引ずり戻し、この様に陰徳のある人を唯おいては此の方の道が缺けると、無慘やなかの折介を大勢



列女傳に陰徳ある者は陽に是を報ずと聞く。陰徳を施さんと兩國或は山下の廣小路などには巾着切られ徘徊してうつかりひよんとしてゐる油断を見すまし、袂へ胴亂や紙入を押し込まると用心すべし。

「叔教が兩頭の蛇を埋めたよりも是が陰徳の早道だ。」

「先づ今日も餘程陰徳を施した。」

「是から山下へ出て、奴が莊子の講釋でも聞かう。」



儉なるは固し、
寧ろ固しけれ
と當世を盡す
通人は粗服を
伊達として、
上總木綿の着
物に地荒き麻
の羽織なぞを
好む。

「向うの新道
はうつかり
通ると、金
を踏んづけ
てならぬ。
忌々しい。」
「あれもどこ
か通人ださ
うな。木綿
揃はまた格
別意氣だぞ。
とかくうる
し木綿の事
だ。」



孔孺子于時蓋菜

芝居などは百
札十二文つて
見物を入るれ
ば、貴き人は
切落へ入り、
敷で見る者は
數見える狂
言の筋も曾
の貧乏を取組
を相圖六つ
鐘を三兩の金
三百兩の金
きつと受取ま
せうと、團三
郎が臺辭を
んやと嬉し
しがり、對面
の幕にも五郎
が臺辭には賣
山とはいはず
貧乏の山へ入
りながら、手
を空しく歸る
が口惜しいわ
いと言へば、
見物する氣取
をほする。

「三百兩の金
が欲しくも



何ともない
「男、女交り坐
せす、手づ
から授けを
受けずと、
男、棧敷女、棧
敷と言ふが
出来る。
此時入込み
一の湯屋へは
手向なし。」
「東西東西。
やかましい
わえ。」
「コレそら八
殿、肌を人
曲れさつせえ。
事をかゝる
事勿れとある
狂言作りは
諸事左交が
ことだよ。
おいだぞ。」



染藍時子編子孔

大音寺前などは物騒になり。夜更になると、追剥がれといふ者出で、往き來の人を待ち受け、取摺まへて、おのれは眞裸になり、衣服大金銀を括しつけて逃げる。追剥がれといふ者は扱々張合のない者だ。斯うした所が別アねへ、丁半のくづれか、駄込み訴訟にくやうだ。」



「禪は此方の
例刻が見え
るから勘忍
してやらう。
おさらば
く。」
「ヲヲ、寒い
寒い。斯う
してはみた
が、さぞ貴
様は温かだ
らう。美し
い。」
「金銀は申受
けませうが
せめて衣服
大小は御免
なさりまし
。悲しや。」
「申し申し。」
「おれがなり
は手習ひ子
が留められ
たやうだ。」



染藍時于編子孔

斯くて世の中
 の人、聖賢の
 道を學び至徳
 要道ありてお
 のづから君子
 の徳至れば、
 紛争のなき御
 代となり、天
 明地祭と言う
 て、地もその
 徳を感じ、五
 穀作りもせぬ
 野山に生えて
 穂に穂が咲き
 實りければ、
 百姓も置き所
 に手古招り、
 爲方なくばら
 長左衛門様へ
 いで、三年が
 間御年貢を一
 倍増しにお取



り上げ下され
 と、御慈悲を
 願ふ。
 ぼら長左衛門
 も仁徳の厚き
 人故、早速聽
 届け給ひ、お
 救はれ米を取
 りあげ給ふぞ
 有難き。
 「あまり地神
 が通りもの
 過ぎて困つ
 たものだ。」
 「御訴へがす
 んだら、兩
 國の麒麟の
 見世物を見
 ませう。」
 「うち續きま
 した豊年で
 何を申すも
 置所に難儀
 致します。」
 「お年若ぢや
 が有難い殿様
 ぢや。あり、かゝるも



天もまた其徳
 を感じ、御料
 簡違ひにて空
 より金を降ら
 せ給ひ、初手
 のうちは、此
 處に三兩、か
 しこに五兩位
 の事なりしが、
 段々大降りと
 なり、深山嵐
 に山吹の、花
 吹きちらす如
 くにて、人々
 大きに難儀す
 る。
 「是は何でも
 大變でござ
 ります。天



上で無間の
 鐘を撞くさ
 うだ。」
 「紀文大盡の
 年越の趣向
 といふも
 だ。」
 「金の降る夜
 はナアひと
 しほ床し。」
 三味線の手は
 人の知る所な
 ればこゝに略
 す。
 「とんだ悪い
 天気だの。
 もう上がり
 さうなも
 だの。」



斯くて高き山深き海、谷も川も家居も、米と金にて埋みけれど、天道人殺さずと諭の通り、金銀の世界の人、金銀の中をかき分け、てやうやう辛き命を助かり、至極上々吉飛切、芽出度き御代こそ有難き。

「金は湧きもいたとは、よくいつたものだから湧かれては謝る。」

「土州の灰とは強いてん違ひだの。」

「芽出度いにも程があつたものだ、かうも芽出度い事もないものだ。」

「そりや出た出た、金の子が出た、金の子が出た、子もむぐる。」



波演画
京傳作